ネトラセ妻
～他の男の玩具に成り果てる～
基本CG12枚+α
本編たっぷり100枚収録！

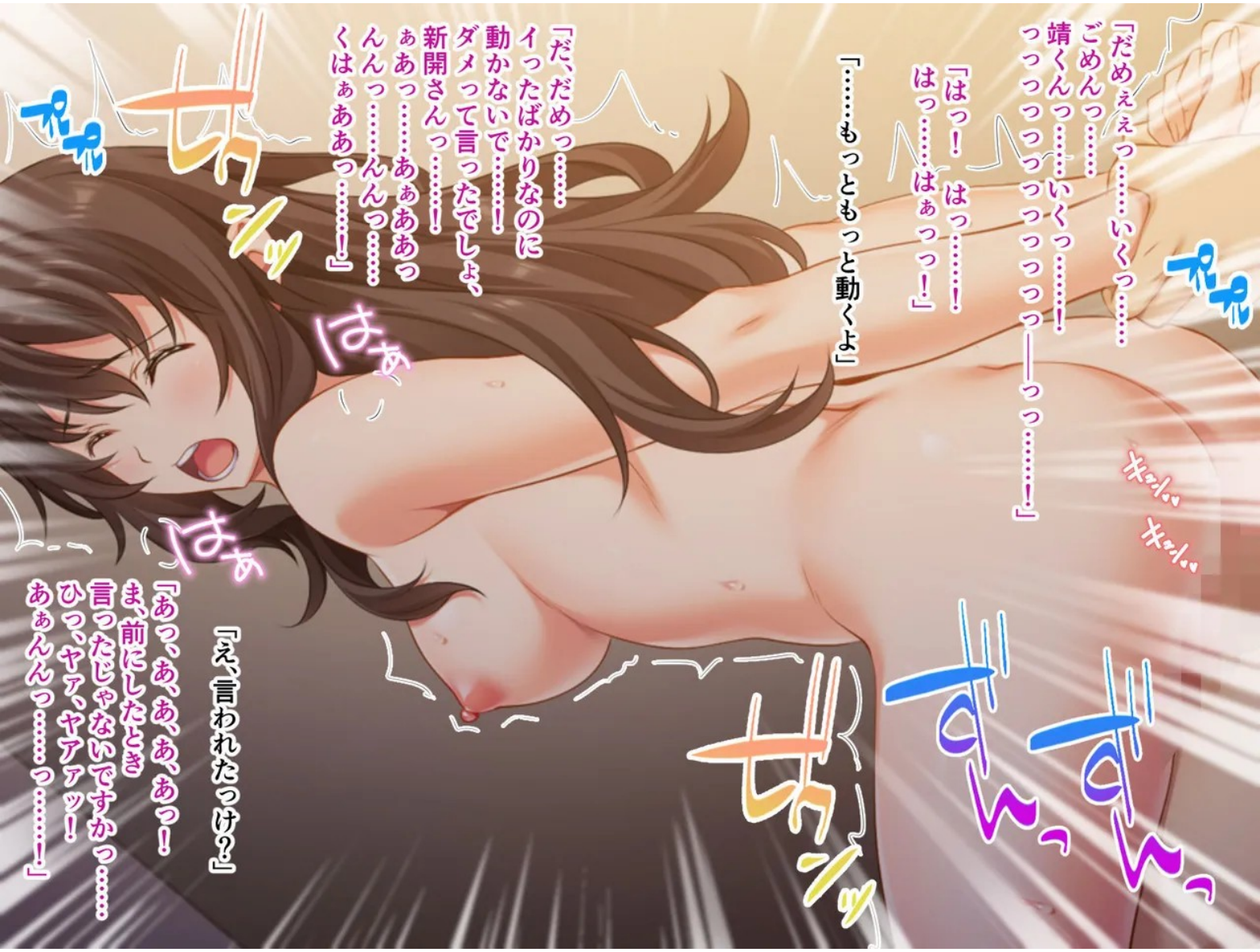
性格が良くて美人で、旦那一筋。こんな完璧な妻、なかなかいるものではない。
そうわかってはいるものの――。
妻が「他の男を知らない」という点だけが、俺にとっては不満だった。
だが、そんなある日、妻――真由美にも
「他の男ともセックスをしてみたい」という願望があることを知った俺は――。
この人ならば抱かれてもいいと思う相手に、
お互い合意の上で、彼女を『貸し出す』ことにした。
貸し出しから帰ってきた妻が語る彼との行為は、
あまりにもリアルで、俺に驚くほどの興奮をもたらした。
そして、3回目の貸し出しの際。
俺は真由美に、「彼との浮気行為を
撮ってきて欲しい」と、ビデオカメラを手渡したのだった……。

「感じてる高坂くんの顔、丸見えだよ」
『あ、ああっ……だ、だめっ……
見ないでっ……はぁっ、ぁああっ……』
はぁ
はぁ
……あのカメラの向こう側に
靖くんがいるのだと思うと、
今まで以上の恥ずかしさに襲われてしまう。
……それに。
新開さん、いつもよりも張り切ってる気がする。
「ぁっ、ああっ……ハァ、ハァ、ハァ……
新開さん、そんな、動かないでくださいっ……」

「あ、あ、あ、あ、や、だめっ……
あ、あっ……くうっ……
はぁんっ……
くぅぅっ、はんっ！
はぁっ……んんっ……！」
「声、我慢してるんだ？」
「はぁっ、はぁっ、あっ、うっ……
べ、別に、そういうわけじゃっ……
うっっ、ひっ、あぅんっ、
あぁっ……！」
「そうだよね。
撮影しているもんね。
普段の高坂君の姿は、
さすがに見せられないか」
「はぁっ、ぁああッ……
んんっ……！
そんなこと、言わないで
くださいっ……！
あんっ、ふぁっ、あぁっ、
だめっ……だめぇぇぇっ……」

いくら靖くんが、
私が感じているところを
見たいと言っても。
あんなに乱れている所は
見られたくない。
「そこまで我慢できるなら、
前にしたときも
すればよかったのに」
「ぁっ、ああっ……あっあぁっ！
だめ、だめっ……新開さん、
まだゆっくりっ……！
んぁあっ……あっあっ
あっあっあっあっ……！」
はぁ
はぁ
ズンッ
ズンッ
ズンッ
「もっと顔見せてあげたら？
夫以外の男とセックスを楽しむ表情を」

「ふぁっ！
やだっ、あっあっあっ
あっあっぁあっ……！
んんっ……んはぁあっ……！」
「いつもは喜んで
腰を振ってるのに。
今日は本当に控えめだね」
「はぁ……っ……あぁっ……！
い、いやっ、変な事、
言わないでっ、くださいっ！
んはぁっ、ふぁっ、ぁあぁ……
はぁっ、ああっ、あぁ……！」
はぁ
はぁ
そんなに自分から
振ったりしてない。
新開さんの方なのに、
激しく振ってるのは。
「あぁっ！
だめっ……だめっ……！
新開さんまって、お願いっ……
ああ、あ、あ、はあぁっ……！
まってっ……！　んんっ……
あぁぁんっ……！」


「だめぇぇっ……いくっ……
ごめんっ……
靖くんっ……いくっ……！
っっっっっっっっっっっっ——っっ……！」
「はっ！　はっ……！
はっ……はぁっっ！」
「……もっともっと動くよ」
「だ、だめっ……
イったばかりなのに
動かないで……！
ダメって言ったでしょ、
新開さんっ……！
ぁあっ……あぁああっ
んんっ……んんっ……
くはぁああっ……！」
ずんっ
ずんっ
キュッ
キュッ
ぷる
ぷる
ぷる
ぷる
はぁ
はぁ
「え、言われたっけ？」
「あっ、あ、あ、あ、あっ！
ま、前にしたとき
言ったじゃないですかっ……
ひっ、ヤァ、ヤアァッ！
あぁんんっ……っ……！」

「そんなに感じちゃって。
いいの？
これ後で見られるんでしょ？」
「こ、こんなじゃないのっ……
靖くん、本当だからっ……あ、あっ……
だからっ……勘違いしないでっ……
あ、あああああっ……！」
何とか我慢しないと。
いくらなんでも
こんなに感じてる姿、
引かれるに決まってる。
……なのに。

「あっ、あ、だめぇえええっ、新開さん、それだめ、だめえっ！だめなのっ！　あぁああっ……んっ、あ、あ、あぁ……あぁあ……！」
「もう少しでイキそうだから。ちょっとだけ我慢して」
「う、うんっ……わかりましたっ……でも、早くイってくださいねっ……あっ……あ、あ、あっ……うっ……あぁぁっ！あ……あ、ああっ……！」
はぁ
はぁ
ビクン
ビクン
ズッ
ズッ
「ひぃっ、ああっ、あぁうっ、くっ、んっ！はっ、はぁっ……うぅぅんっ……！あ、あ、あ、あ、あんっ！はぁっ、ぁあっ！」

「ひっ、あぁああっ……！
あっ、はんっ！　んっ……
ハァ、ハァ……あくっ、
あはあああっ、
ふぁっ……あっ、あっ！」
だめ、
我慢しようと思ったけど、
やっぱりだめ。
もうイキそう。
もう我慢できない。
「っっ……！
高坂くんっ……」
「きてっ……きてっ……
悟さんっ……！
あぁっ、んっ、んんっ、
ああっ、あぁっ、あああっ！
きてっ……！」

「ぁあぁぁあっんんっ……ああぁぁぁっ……
きてっ……きてぇっ……！
あぁあっ……あぁぁぁぁぁぁぁぁっ――！」
ビュッ
ビュッ
「あ……ぁ……ぁぁ……あ……っ……
はっ……はぁっ……はぁ……はぁっ……」
「う……ごめんね……靖くん……
ちょっと……はぁ……はぁ……
気持ちよくなりすぎたみたい……はぁ……はぁ……」
「いつもは、あんなじゃないんだけど……はぁ……」
「そうだよね。高坂君、いつもはもっとすごいもんね」
「ちょっと新開さん、いいですから、そういうの」

……そうして私は、ふらふらとバスルームへ移動した。
気が付くと浴室に新開さんがいた。
新開さんの手が、ゆっくりと下に降りていく。
私のあそこは濡れたままだ。
「する？」
「じゃあっ……あ、あと、一回、だけですよっ……？」
「OK……じゃあ、また撮らないとね」
撮らなくても……と思ったけど。
今日は靖くんに撮ってきてって言われているから、
……やっぱり撮らないと浮気になっちゃうのかな。

「んんんんんっ……！
んんんん――っっっ」
そんな私の中に、
待望のお××××が
入り込んできた。
「や、やだっ、
こんなくっついた格好っ……
あ……はあっ、こんな……
あっ、ああっ……！」
ぷる
ぷる
ぷるぷる
「旦那さんに
見られるのは嫌？」
「い、嫌に、
決まってるじゃないですか、
そんなっ……っぁあぁっ……
ぁあああっ……はぁあっ……
あ……あぁっ……んぁっ！」
「でも、案外喜んでいるかもよ？」

「ぁあっ……いゃ……そんな……
はぁっ、ああっ……あぁあぁああ……」
「高坂君が感じれば感じるほど、
旦那さんは嬉しいんだろう？」
そういって、新開さんが
深いところにお××××を
突き刺してきた。
「はぁっ、やだっ、あぁっ！
あっあぁっ！　ああぁぁぁんっ……
そんなに、深く入れないでっ……
ダメッ！　ああ……はぁ……！」
「……ほら、ちゃんと教えて
あげないとわからないよ」

「あ、あ、ふぁ……！
ご、ごめんっ……い、今っ、すごく、
深く……入れられてるのっ……はぁっ、
はぁっ、おかしくなりそっ……あぁっ！
あ、あぁあっ……ぁあああっ……はぁあっ！」
「い、イク、いくうぅっ……！
イッちゃう！　んんっ……
んんんんんんんんんんっっっ！」
はぁ～……♡
「あっあっあああっ……ふぁっ……
あぁぁんっ……ぁぁぁ――……
だめ……だめだよ……あ、あっ……」
はぁ～……♡
「ほら、ちゃんと見せて。
イったあとのトロンとした顔」

カメラを見つめた。
靖くん、どんな顔で
私を見ているんだろう。
「……こんな顔するの？
普段は」
「はぁーーーー……
はーーーー……っ……
しない……しないですっ……
はーーーっ……はぁ……」
興奮、してくれて
いるのかな。
こんな、いやらしい
私を見て……

「ぁあっ……ぁああっ……！
ず、ずるいよっ……新開さんっ……
ぁあっ……ぁああっ……
あ……あぁ……っ！」
「ああぁっ……あぁっ……
さっきからっ、私の弱いところ
ばっかりっ……！
ふぁっ……んぁっ、
こんなのぉっ、き、気持ち良く
なっちゃうにっ……
きまってるじゃないですかっ」
「正直だからご褒美ね。
高坂君が一番好きな動きで
イかせてあげる」
「あぁっ、イ、イクゥッ……
ぁあああっ、イッちゃうっ――！」
「――っっ！　んはあっ！
はあっ！　はあっ！　はあっ……！」

「はんっ、あぁっ、
んっ、あぁああっ……！
新開さんっ……
意地悪しないでっ……
あっ、ああっ……っ……
お、お願いっ……」
「さっきのところっ……
あ、あっ……さっきの
ところがいいのっ……
あ、はぁ、はぁ……っ！
んん……あ、あ、あんっ、
ああ……ハァア……
ぁあっ、はぁっ……！」
はぁ
はぁ
「そんなに気持ちいいんだ、
俺とするのが」
「そんなことまでは
言って……ぁああっ……！
ないっ……！
あぁっ、んっ、んんっ、
ぁああッ……んんっ……！」
「じゃあ、どうしてそんなに
エッチな声だしてるの？」

「あっあっあんっ……あ、
あああ、ああ、あ、あああ、
も、もうっ……限界っ……
新開さんっ……新開さん……
お願いっ……！」
もっともっと、もっと……
一晩だってしてほしい……！
「一緒にイこう、高坂君」
「はっ……ハァっ……くっ……
ぐっ、ダメっ、おかしくなる、
おかしくなるぅっ……あ、あ、
あ、あ……あぁっ……！」
「来るっ……ぁああっ……
きちゃうっ……凄いのっ……
き、きちゃうっ……！
あぁっ、んっ、んんっ、んはぁっ！」
はぁ
はぁ

「っっっ……！　俺もっ……！」
「きてっ……来てぇっ……
悟さんっ、ふぁっ、
ふぁぁっ……あっ、んんっ！
くぅっ、あああああああああっ……！」
「きてえええええええ――っ……！
――っっ……」
「あっ、ぁぁぁっ……
悟っ……さんっ……で、出てる……
ぁぁっ……すごい……
どくどくしてるっ……」
「はぁ……はぁ……っっ……
はぁ……はぁ……」

「……録画、止めました？」
「ああ、止めたよ」
「お疲れさん。やっぱり、普段と違った？」
「それはそうですよ。すっごい我慢しましたし」

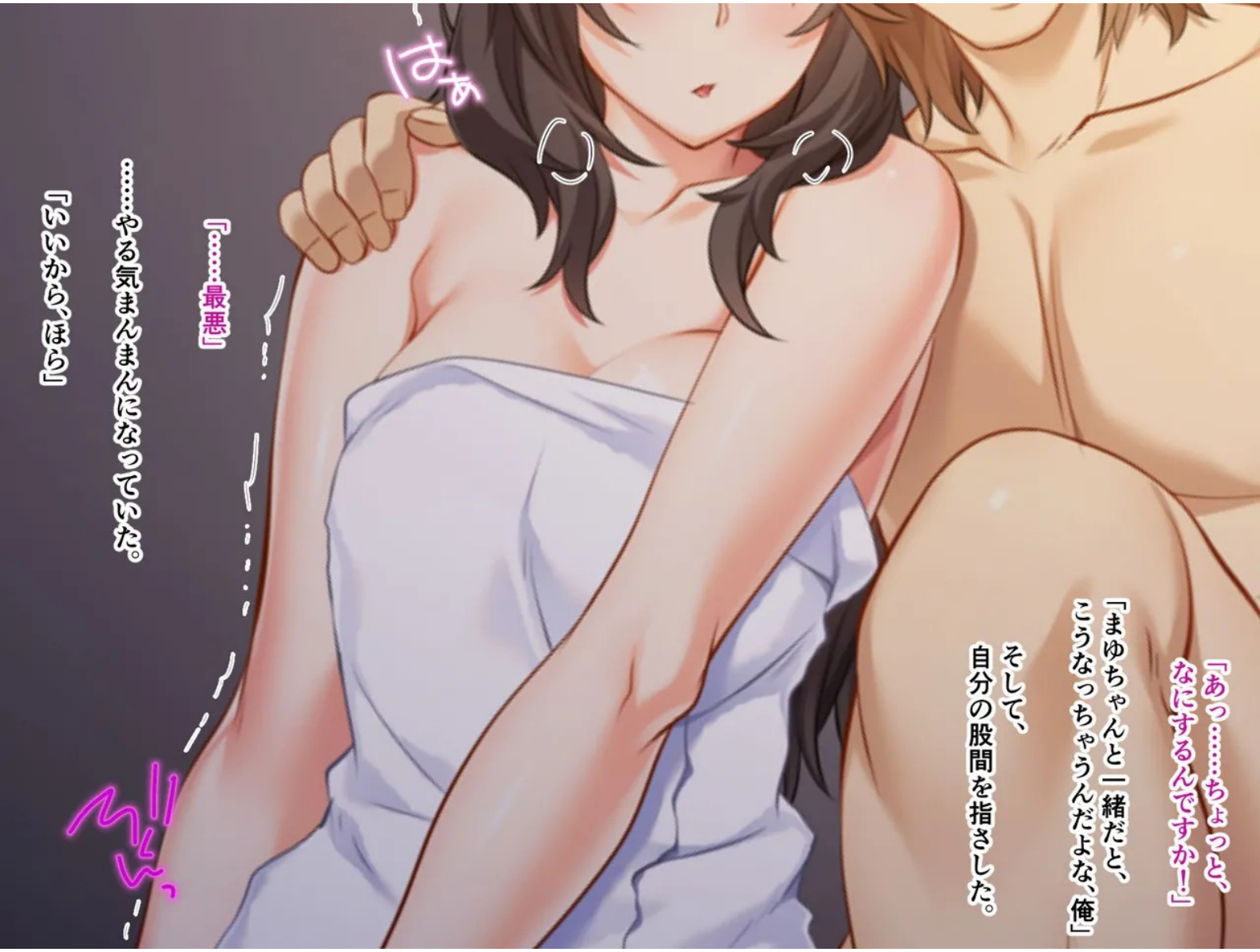
むう…
「……それは今日で3回目ですし、それなりには慣れますよね」
「3回も続けるとは思わなかったな、最初は」
「私もです。最初の一回で終わりかと思ってましたから……」
「え……あれ、我慢してたの？」
「我慢してたんですよ、私なりに」
「俺とするのはだいぶ慣れた？」

「本当に好きなんだね、君の旦那さんは」
「大事にされてるのか？少し心配になるよ」
クスッ
「よくわからないですけど……一応大事にされてるみたいですよ。これでも」
「ならいいんだけどな」
「まゆちゃん、ちょっとこっち」

「え、なに……んむっ……!?」
「むっ、チュっ……むっ……
ンブッ……ジュプッ……
プパッ……はぁっ……
あっ……んちゅうっ……」
ちゅっ
「んはっ……うぇっ……
これなんですか……」
「ウイスキー。
まゆちゃんも飲むかなって」
「飲まないですよもう……
こんな強いお酒……」
メヤプンッ

「まあまあ。
はい、おかわり」
……と、ウイスキーをまた
口にふくむ新開さん。
「えー……やですって。
私おさけ弱いんですから……」
「んーーー！　ん!!」
ちゅっ
「もーーーー……んっ……」
仕方なく私は、新開さんにキスをした。

「…んっ、っ……んっ……
んむぅ……んっ……
ふっ……んっ……」
「んはっ……はーー……
はーーっ……ううっ……
お酒とタバコの臭い……」
「旦那とは全然違うでしょ」
ちゅっ
ちゅぱ
ちゅぱ
ちゅっ
「んっ、チュ、むんっっ……
れろっ……ペロッ……
んっ、んん、うぅっ……」
……そして、お口の中の
ウイスキーを
舌を絡めて味わった。


「あっ……ちょっと、なにするんですか！」
「まゆちゃんと一緒だと、こうなっちゃうんだよな、俺」
そして、
自分の股間を指さした。
はぁ
「……最悪」
……やる気まんまんになっていた。
「いいから、ほら」

「むっ……んっ、チュッ……
ぷはっ……ぁああっ……
んんっ……んはぁっ……」
「……んはっ……
ほんとに
だめですって……」
嘘。
期待してる。
ぢゅぱ
ぢゅぱ
はぁ
はぁ
3回目を。
無理やりされちゃうセックスを。
「ちょっとだけだから」
「あっ……んっ……
もうっ……」

「んっ……あ、あ、
あああ、あ、あっ……
ぁぁぁぁぁぁあああっ……！」
ズンッ
「入ったぞっ……
すごい締め付け」
「や、やだっ……そんな事
いわないでっ……」
ズンッ
「もう撮ってないよ、高坂君」
そうだった。
もう、我慢する必要はないんだ。

「んっ、んんっ、あうっ……
っくっ…あっ……あぁっ、
ハァ、はぁっ……」
はぁ
……そう思うと、
すごく気が楽になった。
気持ちよくなっても
いい、って言われている
みたいだった。
はぁ
「……ねえ、真由美って
呼んでもいい？」
「はぅんっ！
んっ、ふぁっ……ぁああっ……
あぁっ、ダメ、ダメですよっ、
そんなっ……んっ、んんっ、
ぁああッ……んんっ……！」
「動くよ、真由美」

呼び捨てにされると、
まるで新開さんが
恋人のように思えた。
本当は全然違うのに。
私の上司でしかないのに。
「凄い、あっ、
激しっ、あぁぁんっ！
あぁっ……
あぁぁぁぁあ……
あっあひぃぃっ！」
ビクン
ビクン
ビクン
「本当は沢山
声出したかったんでしょ、
さっきは」
「は、はいっ、が、我慢するの、
大変でしたっ……ぁあっ……
はぁぁあっ……ぁあっ……うっ！」
「そうだね。
まあ……ほとんど我慢出来て
なかった気もするけど」
ブブッ
ブブッ

「旦那さんとしてるときと、全然違うんでしょ？」
「靖くんのエッチは、特別だからっ……！新開さんとは、違いますっ……あはぁ……んっ…くぅん……はぁっ……あっ……！」
ビクン
はぁ
はぁ
「ほら……名前。真由美も俺の事呼び捨てでいいよ」
「ああぁっ……だって、それじゃ本当に浮気みたいになっちゃうからっ……はあっ、あぁあ、っああぁ……ぁあっ……！」
「浮気、か」
ズニュッ
ズニュッ
ビクン

ちゅっ
「んっ……
んむぅ……んっ……
ん、ふぅっ……んんっ……
ん、ふうぅぅっ……
ん、むんっうぅっ……！」
ビクン
ぢゅぱ、ぢゅぱ、
「チュッ、ペロッ……
んぶ……っ……
むぶぅっ……ん、
んん、んっ、んっんっ……
んはぁっ……」
ビクン
「……こんなにいやらしく、
舌を絡ませる仲なのに？」
「だってそれはっ、
悟さんがキスしてくるからっ……
はぁっ、はぁっ、あ、いっ、あっ……
あぁあっ、いっ、いいぃっ……」
「真由美からだって、
することあるじゃん」

「あぁぁっ……！
あぁっ、イ、イクゥッ……
イクッ……だめっ……
だめぇぇぇぇぇっっっっ……」
「んはぁっ……はぁっ、
はぁっ……ぁぁ……
ぁぁあぁっ……」
「はぁっ……
すっごい締め付け。
本当、馴染んだよね」
「だって……はぁっ……
はぁっ……出張に来るたびに、
新開さんのお××、ずっと
入りっぱなしじゃないですかっ……」
新開さんとセックスすると、
3時間とか4時間があっという間に
過ぎていってしまう。

「あっ、あぁっ、ひぃっ、
あ、あ、あ、あ、んっ……
すきっ……悟さん、
悟さんっ……！
あっ……っあっ……
ぁあっ……！」
「いいよ、
もう撮ってないから。
いっぱい呼んで、
俺の名前」
「あ……あぁ……っ……
悟さん、ひっ、やぁあっ……
あんっ……あっ、あぁぁぁっ！
ぁああっ、うんっ……はぁあっ……
はぁっ……んんッ……！」
「あ、あ、あ、あ、だめ、だめっ、
こんなのっ、気持ちいいよっ、
あっ、き、気持ちいいっ、いいっ、
いいよぉおおぉおおぉ……！」
「俺とセックスするの好き？」

「ぁっ、ハァ、ぁああっ、すきっ、好きです、悟さんと、セックスするの、好きっ……ふぁ……っ、んあぁっ、んっ、だめっ、はっ、あっ、あ、ああ、っ……っ……！」
「じゃあ、また出張に来た時はセックスしような」
「あ、あ、ふぁっ、はいっ、しますっ、セックスするっ……悟さんと、あはあああっ、ああぁっ……んっ……ぁふあはっあぁぁあぁぁあっ……！」
「っっ……！イキそっ……！」
「きてっ、きて、悟さん、もっと、もっと激しくしてっ……あぁっ……めちゃくちゃにして……！」
はぁ
はぁ
ビクン
ビクン
P
P
P
P
P
P

「あっ……ぁああっ……
だめ、だめっ、だめえっ……
ぁあああああっ、イキそう、ぁあっ、
ハァン……もうだめっ……！」
「っっ……！
真由美、出すぞっ……！」
「あっあっあっあっあっ……
イクうぅぅぅぅぅ！
イクぅぅッッッ……!!」
ビュルルッ
ビュルルッ
ビュルルッ
「あっっっ……はぁっ……
で、出てるっ……あ、
いや……いやぁ……」
「はぁ……はぁっ……！
はあっ！　はあっ……はぁ……
はぁ……はあぁぁ……」

「……また出張が決まったんだー……」
「？　ああ。いつものやつ？」
「そうなんだけど……本社に行くのとは別に、もう一つ決まりそうなの……海外出張でフランスに行くやつ……」
「結婚してるので他の人にって言ったんだけど、聞き入れてくれない可能性高いって新開さんに言われちゃって……」
「さすがに嫌だよね……新開さんと一緒に、一か月もフランスに行くのは……」
「そこまで行くとさすがにな……」
「……実はね、そろそろ会社やめようかなー……とも思ってたんだ」
「……もう少し、時間かけて考えてみるね」
「……そうだな。それがいいと思う」

「……あっ、海外出張の話も大事なんだけど……
今度の出張行ったらしばらく無くなりそうなんだ」
「ああ、いつもの大阪本社に出張するやつ？
今度の行ったら、しばらくもうないのか？」
「私が会社に在籍している間はもうないかなぁ……
だから多分最後になるとおもう」
「……どうする？　靖くん？」
「……私が貸し出される機会も、きっと最後になると思うから……
だから、靖くんが決めてくれてもいいよ」
「じゃあ、最後にひとついいかな」
「……する？」
「ああ。そして……それを間近で見たい」

……新開さんの部屋は、
真由美の部屋とは違ってタバコの臭いが充満していた。
「……じゃあ、奥さん、お借りしますよ」
「は、はい……」
……しかし、プレイはなかなか始まらなかった。
何とか新開さんが雰囲気を作ろうとするのだが……
真由美の視線が、忙しなく俺と新開さんの間を行き来していた。
「あのね……靖くん。ごめん。
最初だけ……隣の部屋にいてくれる？」
「……それって、セックスが始まってから……戻ってこいってこと？」
「うん……ごめんね」

俺がいなくなれば進展するのか。

「そうだよな。進展するよな……」

きっと俺には話していないようなことも……

新開さんとはしているのだろう。

生の××××でセックスをしていることだって、十分に考えられる。

中に出されたりも……それも、真由美が望む形で。

「ああっ……真由美……」

……そうして、俺は20分待った。

もう、始めていてもおかしくない時間。

真由美が新開さんのセックスに没頭しているであろう時間。

その時間を待って……元居た部屋に戻った。

「あっ、あ、あ、あ、あ、あああああっ……！　っっっっっ――！」
部屋に入って俺を迎えたのは、真由美の絶頂の吐息だった。
ヤ4ヤ…
「あっ……！
ま、まってっ……新開さん、靖くんが、靖くんが……！
んんっ……ああっ！
はぁっ、あっあっあっぁあああっ、ぁあぁあああっあっ！」
「今日は、見せるって約束なんでしょ？」
はぁ
はぁ
俺は真由美に
指定されていた
ソファに座る。
「高坂君、締め付けすごいな。
やっぱり旦那さんに
見られると違うんだね」

「だ、だめっ……あぁうっ……
んっ……ああっ、あぁうっ、
ぁあっんっ……ぁあっ……
やっ……っ……あぁ……
あっ、あっ、あっ！」
「んあぁっ、はあっ、
い……く……
っっっっっっっっ――」
「ぁぁぁ――……
あぁぁ……――あ、
あっ……はぁぁ……」
動画で見た時以上だった。
目の前で、
妻が浮気しているのだ。
「すっごいエッチな顔して
イクんだね……真由美は」

「旦那さんに
見られながらされると
感じちゃうんだね」
「あ……あぁ……
あっ、あっ、あっ！
んっ、ち、ちがいますっ！
あ……あぁ……っ……
んあぁっあぁぁっ！」
「本当はもっと乱暴に
してほしいんだろ？」
ズブッ
ズブッ
ズンッ
はぁ
はぁ
「あっ、いやっ、そんな事
思ってませんっ……！
あぁあっ、あぁ……あぁあ……
ぁふあはっあぁぁあぁあっ……！」
「本当に？　じゃあ、どうして
そんなに感じてるの？」
「あぁぁんっ！　ああっ……！
だ、だってっ……だって、だってっ……
新開さんのがっ……か、固くてっ……
すごく硬くて、奥まで届くからっ……！」

「そんなに気持ちいいのか、真由美……」
「あっあっあっくっ、はぁあっ……はぁっんんッ……あんっ……はぁ、はぁ……あっ、んっ、あぁっ！　あ、あ、あ、あっ」
ズンッ
はぁ
はぁ
「……いいよ」
「……もっともっと、もっと感じてくれ」
ズンッ
「あっ、あ、か、あ、あ、あ、あ、だめ、だめっ……それきもちいいっ……！ああっ、気持ちいいっ……！気持ちいいっ、気持ちいい、いいっ、いいいいっ……！」

「ちょっと声大きいね。抑えないと」
「んむっ……ジュプップパッ！むっうぅうっ……んんぅっ！んむっ……クチュッ……ブチュッ……」
ちゅっ
ぢゅぽ
ぢゅぽ
ビクン
ビクン
「俺とする時とは大違いじゃないか……そんなに気持ちいいのか、新開さんのセックスは」
「あぁっ……！き、聞かないで、そんなっ……！ぁんっ……はぁっ、あぁぁんっ……！あんっ……くぅぅっ、ぁあっ！」
ブヒュッ
ブヒュッ
「……いつも、そんなに濃密なキスをしているのか」

……そうして。

二人の絶頂が重なった。

「では、私は食事がてら少し休みますので、1時間ほど失礼しますね」
「……奥さん、抱いてあげてください」
……新開さんが去って、ようやく金縛りが解ける。
「真由美」
「やす……くん……」
俺は、他の男に犯●れ、
崩れ落ちた格好のままでいる
真由美に近づくと……
はぁ～……♡
はぁ～……♡
ビクン！

「あっ、あああっ……んんんっ……
だめっ……あ、
あああああああああああああっ……!!」
無理やり×××をねじ込んだ。
ずぷっ
「あんなにっ……あんなに
淫らに感じやがってっ……!」
はぁ
はぁ
「んぁっ、あんっ、はんっ、だ、だめっ、
だめだよっ、こんな乱暴なのっ……!
あぁああっ……ハァ……ぁああっ……
あぁっ、んっ、んんっ、
あ、あああ、ああ、あ、あああ」
「そんなに気持ちよかったのか!
あんなにイキまくって……!」

「あぁっ、あっ、だってっ、だってっ……
我慢できなかったんだもんっ……！
あっぁあっ、はぁあっ、ぁあぁあっ……
あ、あ、あ、あ、あっ……」
はぁ
「キスだってあんなに
嬉しそうにっ……」
はぁ
「そ、そういうつもりじゃ
なかったっ……
キスしてなんて、
わたしいってないっ……！
あぁあっ、いやぁあっ……
ああっ、ああん、やっぁあっ」
「新開さんにこうやって
激しくされたのが
そんなに嬉しかったのか!?」
「う、うんっ……！
ごめんなさいっ、新開さんに
激しくされたら、私
だめになっちゃうのっ、
ああんっ……あっ……
だめっ……ああっ、あぁうっ、
あ、あ、あぁああっ……！」

「ああっ……くっ……！」
「はーーーーっ……
あ、ああ、ああっ……
あぁぁ……はぁっ……
えっ……？」
……出してしまった。
ビクン
ビクン
ビクン
生で挿入したまま……
射●してしまった。
でも、構うものか。
妊娠するならすればいい。
「うそっ……なか、でてるっ……
ゴムつけてないの、靖くんっ……!?」

「俺が見ているのに、俺以外の男であんなに感じるなんて……！」
「はぁっ、ぁああっ……ぁあ……あぁっ、ち、ちがうっ……！わ、私のせいじゃっ……はあっ……はぁっ！はあっ……!!」
「求めていただろ、真由美からも……！」
はぁ
はぁ
「私っ、我慢したもんっ、すごく我慢したっ、あっ、んんっ、はぁっ、ぁあっ、はぁあっ、ぁあぁあっ……！んっ、ぁあぁぁんっ……！」
「そんなわざとらしい声を出すなよっ……俺としてるときは、どうせ演技なんだろ……!?」
「あっんっ、靖くんだって、気持ちいいもんっ、う、うそじゃないよっ……本当にっ……！」

「どっちがいいんだ。
真由美はどっちのセックスが好きなんだ!?」
「あ、ああっ！
っっ――っ……
新開っ……さんっ……
あ、あああっ！」
はぁ
はぁ
「新開さんのセックスの方が、
っ……気持ちよかったですっ……！
ごめんなさいっ、ごめんなさいっ……！」
「っっ……!!」
「あ、あ、くっ……っ……！
ぁ、ぁぁ……ぁ……ぁっ……
またっ……でてるっ……」
「っ……まだだ。
まだ……終われないっ……」

「真由美は、まだ俺の×××で、一回もイってないじゃないか……！」
「あぁっ……あっ！だめっ……もっとゆっくりっ……ああっ、あぁっ、あああっ、くっ、あああぁっ……あぁっ……あっ……ぁあっ……！」
はぁ
はぁ
「俺とのセックスなんて、もういいって思ってるんだろ、本当はっ……！」
「あぁあっ……ち、ちがうっ……んんぁあああああっ！あんっ……ぁあああっ……ぁっ……くうっぅう、あっ、んっんうぅぅん――！」
必死に射●感を堪える。

「はっ、んあぁっあぁぁっ！
んっ……あっ……っ……あぅんっ、
あ、あああ、ああ、あ、あああっ！」
でも……あんなものを
見せられたあとで、
生でヤっているのだ。
我慢なんて、
何の意味なかった。
はぁ
はぁ
「ああっ、ああん、やっぁあっ、
あぁっ、んっ、はぁあっ！
あっ……うっ……ぁあっ……
あぁっ、あっ、あっ、あぁぁっ！」
「っっ……!!」
「はっ！　……はっ……！
はぁっ……！　はぁっ！
はぁっ……はぁっ……」

「けっきょく……一度もイかせられなかった……」
「……ううん。ちゃんと最後イけたよ。……最後すごく気持ちよかった」
「嘘……じゃないよな？」
「そんなウソつくわけないでしょ？ちゃんと気持ちよかったよ、靖くん」
「そっか……よかった……。……ごめん。本当にごめん。中に出しちゃって……」
「ちょっとびっくりしたけど、いいよ。だって、子供……そろそろつくらないといけないしね」
「……こんな風にするのは、もう絶対やめる。本当にすまなかった」
「いいってば、本当に。でも……次はちゃんと相談してからしようね？」
「ありがとう、真由美……」

結局、退職前に最後の仕事を収めたいということで、
真由美はフランスへ出張に行くことになった。

「……じゃあ、行ってくるね」

「ああ。気を付けて」

「……愛してる、靖くん」

「愛してる、真由美」

貸し出しは前回で終わりだから、
そこだけしっかりしてほしいという俺の願いを、
真由美は笑顔で受け入れてくれた。

だから……出来る限り、真由美の事を信頼し続けよう。

一月後……彼女を笑顔で迎え入れるために。

愛する妻に再会できる日を、俺は心待ちにするのだった。

「んっんっ……むっ……やぁっ……んっ、チュッ、んんっ、むうっ、はぁっ……あっ……んっ……ふうっ……んっ……」

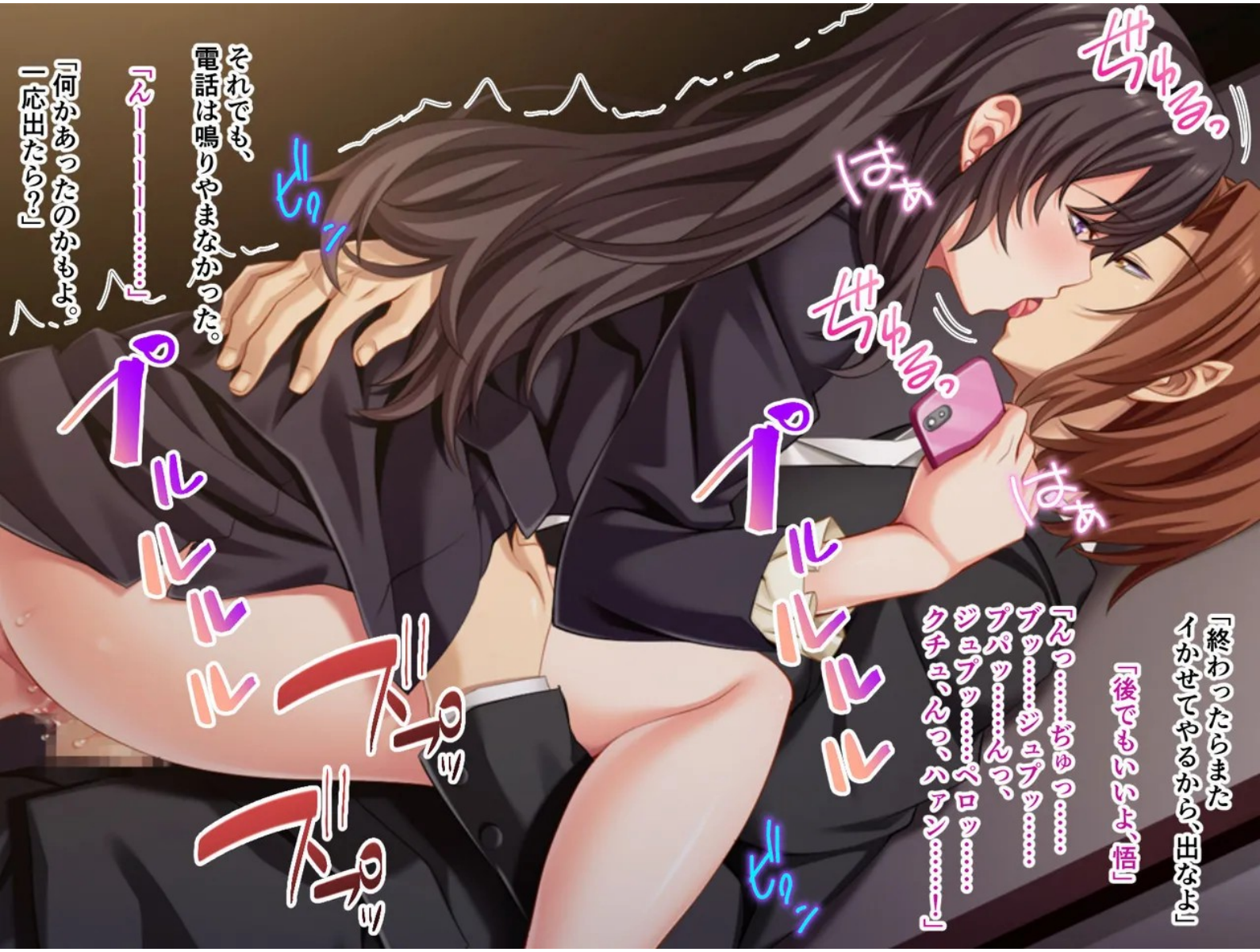
出張から3週間が過ぎて。

私はついに一線を越えてしまった。

「むっ、チュ、んんっ……！　ふんっ……むっうぅうっ……！　んむんっ……ふっ……むうっ……っ……んっ……ぅうぅうっ！」

「なってるよ、電話」

「……はぁ……はぁ……いいところだったのに……」


「終わったらまたイかせてやるから、出なよ」
「後でもいいよ、悟」
「んっ……ぢゅっ……ブッ……ジュプッ……プパッ……んっ、ジュプッ……ペロッ……クチュ、んっ、ハァン……！」
ぢゅるっ
はぁ
ぢゅるっ
はぁ
イルルル
ビクン
イルルル
ビクン
それでも、電話は鳴りやまなかった。
「んーーーーー……」
「何かあったのかもよ。一応出たら？」
イルルル
ズプッ
ズプッ

「もう……わかった。うごかないでね？」
「もしもし、靖くん……？」
「どうしたの、急にかけてきて」
ちゅっ
はぁ
はぁ
「いや、どうしてるかなって」
「まさか浮気、してるんじゃないよな？」
「浮気？　まさかー。してるわけないでしょ？」

「ほんとに？」
「ほんとだよ。新開さんだってわかってるし。そんなのするわけないじゃん」
「ま、そうだよな。なかなか出てくれないから、ちょっと心配になったよ」
クスッ
クスッ
ちゅっ
「私がエッチしてると思った？」
「……ちょっとだけ」
「してもいいなら、するけど？」
キッパリ
キッパリ
「だめだって。さすがに今回は」
キッパリ
キッパリ

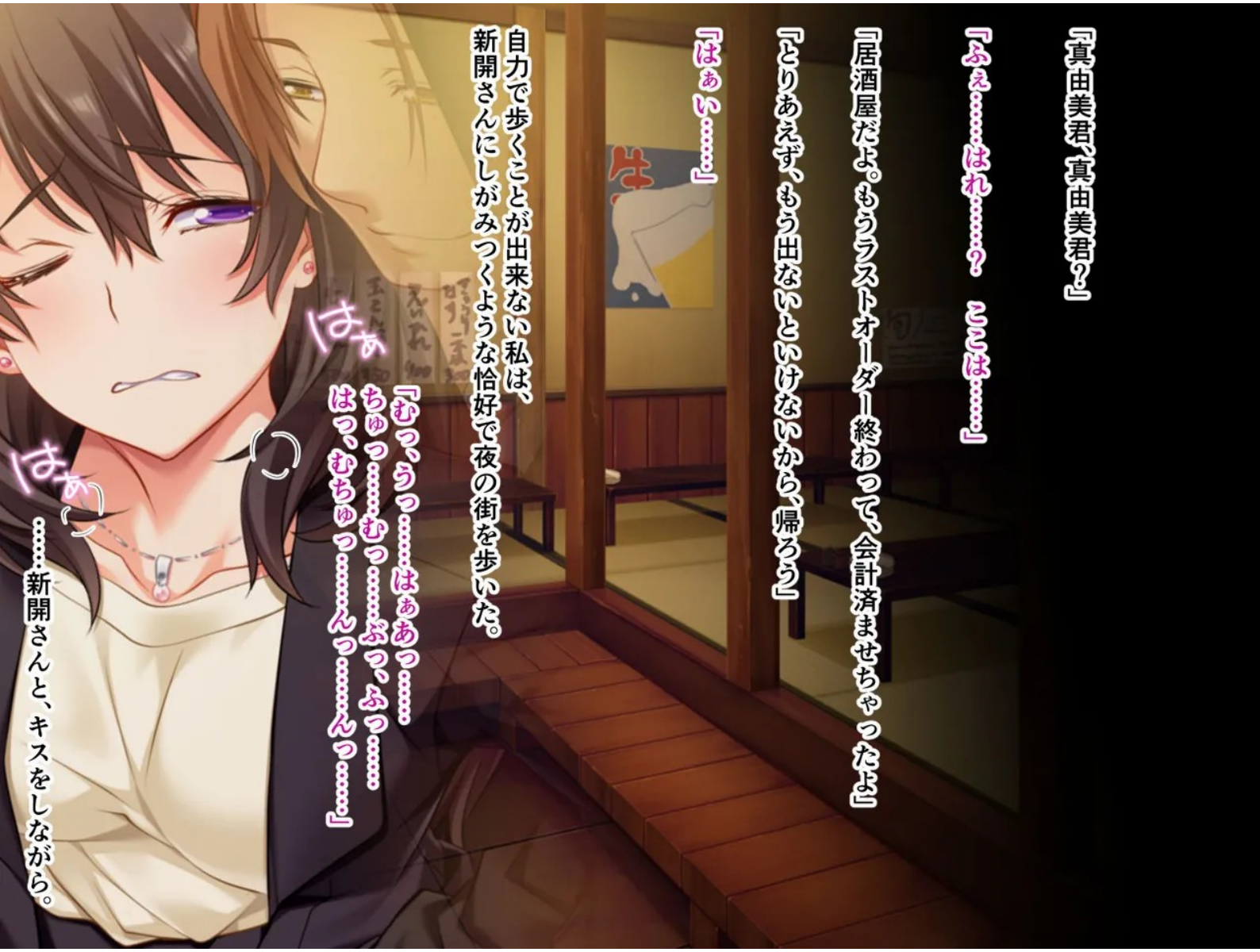
「愛してるよ、真由美」
「うん……愛してる、靖くん」
「……悟……んっ……」
プッシュ
ちゅっ ちゅっ
はぁ
はぁ
グヂッ
グヂッ
長期の海外出張。
言葉の通じない国。
思えばそういったストレスのはけ口だったのかもしれない。
「むぅう、んっ！
うっ……んっ、ズズッ……
んっ……むっ……ペロッ……
んんっ……んっ……うぐっ！」

「あぁん、やぁだ。ちゃんと気持ちよくして」
「えぇ……疲れるよ、動くの」
「やーだ。気持ちよくしてくれない人とはえっちしない」
はぁ
はぁ
「そうなの？真由美とヤリたいから気持ちよくするわ」
「うん……わたしもぎゅって締め付けてあげるね」

!!
ちゅぱ、ちゅぱっ
「んぐぅぅっ……ん、んふぅ……
ん……んんっ……うふっ、むぅっ、
んっ、ぁあっ……んんっ……
ブチュッ……ブプッ……はぁっ……」
あと数日で出張が終わる。
靖くんの妻である
私に戻る。
そうすれば、
この関係もおしまい。
ズンッ
「んっんっんっ……うんんっ、
んっ……れろっ……ぷぁあっ、
はぁあっ……っ……！
ん、ぐっ、ぐぅっ、ぷぁっ……」
だから……
ズンッ
ズチュッ
ズチュッ
ズチュッ
ズチュッ

「んぅうぅうぅうぅうぅうぅ――っ！
んんんんんんっ!!」
出張が終わるまでの間は。
毎日、こうして悟に抱かれ続けるだろう。
「んは……はぁ……
はぁっ……はぁ……」
「んっ……んっ……んくっ……
ん……んちゅっ……ちゅるっ……
ちゅっ……じゅるるっ……」
ちゅっ
ぢゅぱぢゅぱ
ちゅっ
ビッ
ビクン
ビクン
「まだ時間あるよな、真由美」
「いいよ、悟……もっとしよ……」
へとへとになりそうだな――……
なんて思いながら、私は
悟のテクニックに身を委ねるのだった……

出張から帰ってきた真由美が、退職することを会社に伝えて一ヵ月。
「送別会？」
「うん。私の送別会してくれるんだって。でもねー……私お酒飲めないからなぁ……」
「新開さんに相談してみようか。来るんだよね？」
「それいいかも！　じゃ、新開さんに守ってもらうようにするね」
「そうした方がいいな」
「帰りは遅くなるけど、11時前には帰ってくると思うから」
「ああ、わかった。楽しんでおいで」


「真由美君、真由美君？」
「ふぇ……はれ……？　ここは……」
「居酒屋だよ。もうラストオーダー終わって、会計済ませちゃったよ」
「とりあえず、もう出ないといけないから、帰ろう」
「はぁい……」
自力で歩くことが出来ない私は、
新開さんにしがみつくような恰好で夜の街を歩いた。
「むっ、うっ……はぁあっ……
ちゅっ……むっ……ぶっ、ふっ……
はっ、むちゅっ……んっ……んっ……」
はぁ
はぁ
……新開さんと、キスをしながら。

「ハァン……っ……んっ……っ、ハァ……んっ……」
気が付くと、どこかの家にいた。
「んっ、ああっ、んんっ……」
ああ……そうか。
私あのまま、新開さんの家に……
「ハァッ、ハァッ……っんっ……」

「んんっ……はぁっ……
あっ……んっ……
ふぅっ……んっ……」
……新開さん、
私のカラダ、触ってる。
すごく気持ちいい……
もみゅっ
はぁ
もみゅっ
はぁ
「んっ……あぁぁ……
ぁあっ……あっあっああっ、
あぁ……ふぁあっ……」
……でも、これじゃ
浮気になっちゃう。

「あ、あっ……あ、
ああっ……あっ……」
靖くん、
家で私が帰ってくるのを
待っているのに。
「ぁっ……だ、だめっ……
し、新開さん……？
あ、あっ……んっ……
あ、あっ……」
ビクン
ビクン
はぁ～？
はぁ～
キュッ、キュッ
……新開さんは何も言わずに、
静かに私のカラダを触っていた。
「ぁあっ……いゃ……あぁっ！
ああぁぁんっ……はぁっ、はっ
だ、めっ……新開さんっ……
やめてっ……あっ、んっ……」
ビクン

「ぁあっ……ぁあああっ……
んっ、んっ、う、浮気はっ、
ダメだからっ……ぁあああっ、
あっやっ……くっ、あぁっ、
いっ、やっ……んちゅっ……」
「大丈夫、×××入れなきゃ
ただのスキンシップだよ」
「はぁ、はぁ……ぁっ……
あふぁあっ……で、でもっ……
ぁっ、ぁあああっ、こ、こんなのっ……
しちゃいけないことっ……
だからっ……」
「もっとすごいこと
してるでしょ、俺たち」
「だ、だめ……ほんとに……
ダメぇ……」
はぁ
はぁ
ビクン
ビクン
ビクン
ビクン
ビクン

「旦那さんには俺から連絡したよ。
奥さん酔いつぶれたようなので、
うちの社員と一緒にうちにいます、って」
「あ、あっ……うそっ……
誰かいるんですかっ……？」
「まあいないけどね。
だから、心配しなくてもいいよ」
はぁ
はぁ
「あぁあっ、あぁぁっ！
はぅんっ！　あ、ああっ……
はぁ、はぁ……っ！　んん……
だ、だめっ……あ、ああっ……！」
「そんな声でダメって言っても、
説得力ないよね」

「あっ、あ……あぁっ……
あ、あ、あぁっ、んっ、んんっ！
新開さんが、
え、えっちなところっ……
さわるからっ……！」
「やめて欲しいの？」
はぁ
はぁ
「イ、イキそ……
だから……だめっ……」
「イキそうなのにダメなんだ？
いつもはもっとしてって言うのに」
「イ、イったらっ……
入れなくても浮気にっ……
なっちゃうっ……んっ……」

「そっか。
じゃあイかなければ
触ってもいいんだね」
「う、うんっ……
だ、だから……あっ、
あぁうっ……んっ……
やっ……っ……いっ、
ああっ、あぁああっ！」
はぁ
はぁ
「欲しくなってきた？
これ」
すごく硬い……
「あっ、あ……こんなっ……
あんっ！　あっ、ぁあっ！
あっ！　ひっ、はぁっ！
ず、ずるいっ……」

「あ、あ、あ、く、ふぅっ……
はあっ、あ、あ、あ、あっ、
いっ、いいっ、いいっ……
あ、だめっ……ああっ……
だめぇ……っ……」
「……入れても、
動かなかったらセックスには
ならないと思うよ」
はぁ～……♡
はぁ～……♡
「はぁ……はぁ……
はぁ……はぁ……
っ……はぁ……」
「どうする？
入れるだけなら入れる？」
「入れる……だけなら……」

「ぁぁっ……ぁあぁぁ……
うぅぅぅぅ――っっ……!!
はあっ！　はあっ……っ」
……入れられただけで、
小さくイってしまった。
ズンッ
はぁ～……♡
キュッ、キュッ、
ズンッ
キュッ、キュッ、
「ぁぁっ……だめ、
あ、あっ……だめ、
あっ……だめぇっ……」
「大丈夫？　俺動いてないけど」
はぁ～……♡
「はーーーっ……はぁっ……
あ……ぁぁぁ……ぁぁぁぁぁっ……」

どうしよう。
入れただけなのに、
すごく気持ちいい……
「っっっっ――っ!!
はぁっ!! はあっ!!」
「……2回もイったのか。
入れただけなのに」
はぁ～……♡
キュッ
キュッ
はぁ～……♡
「はーーー……っ……
はぁぁっ……
ち、違います……
あ、あっ……」
「違うの？
俺にはイったように
見えたけど」

「じゅっ……ぷっ、ふぅんっ、
ん、むっ……ぶっ、ふっ……
ふむっ、んっ、んっ……」
「んっ……んんっ……
はっんっ……んっんっんっ……
ハァ……んっ……ハァっ……
ぁぁあ……ぁぁぁぁあーっ……」
キュッ
キュッ
プチ
プチ
ズンッ
ズンッ
はぁ～……♡
「ぁぁぁっ……
だめ……もう……
だめっ……ぁぁぁっ……」
はぁ～……♡
『……動いちゃおうか、もう』
「はっ、はっ、んっ、
ぁぁ……うそっ、だめ、
だめぇ……ぁああっ……」

「きっとこれで最後だし、いいでしょ？」
「んっ、はっ、だめっ……
あっ、ああ、っ……っ……！
あ、あ、ああ……ハァァ……
ぁあっ、あぁあっ……」
ズニュッ
ズニュッ
はぁ
はぁ
「もう、旦那さんじゃ満足出来ないカラダになってるんじゃない？」
「ぁあっ……なってないっ……
なってないもんっ……ぁああっ……
ぁあっ、そんなっ……
ぁあっ……ぁっ、ああっ……」

「だ、だめっ……
あぁうっ……んっ……
あぁっ、あぁうっ、
ぁあっんっ……ぁあっ……
やっ……っ……あぁ……
あっ、あっ、あっ！」
「いいの？
今ヤらなかったら、
多分俺とはもう
することないよ？」
ズプッ
ズプッ
はぁ
はぁ
「だったら、
最後のチャンスなんだから
するべきでしょ、セックス」
「うっんっ!?
ふっ、んんっ……ぷぁあっ、
あっ、あ、あ、あっ……
ぁぁっ……！ んむぅっ……！
チュッ……んっ……ぢゅっ……」

「はぁああっ、
あーあーあーっ……っ……
イ、イっちゃう……ぁあっ……
イっちゃうよっ……」
「ん、んんむっ……く
むっ……うっ……んっんっ
はぁ……んっ……
んふぅんんっんっ……
うっ……んっ……」
ズンッ
ズンッ
はぁ
はぁ
キッ…ﾊﾞ
キッ…ﾊﾞ
ドプッ
「……じゃ、そろそろ
一発目、いくよ」
「あっ、あ、あ、あ、あ、あんっ、
はぁっ、あつ、ぁあっ、んっ……
ハァ、ぁあっ、いやいやっ
あぁん……うああっ……」

「……大丈夫。
抜かずに2回目も
してあげるから」
「ぁっ……あふぁあっ……
はぁっ……んんっ……はぁ、
はぁ……ああ……はぁ……
ヤァ、ヤアァッあぁああっ……！」
ん、ん、
ん♪
はぁ
そういえば新開さん、
ゴムつけてたっけ……
はぁ
もしかして、
生でしてるんじゃ……
「あぁぁんっ！
ああっ……あうっ……ああっ！
あっぁあああっ！
んぅううっ……あぁ……
あっ、あっ、あ！」

どうしよう、新開さん、どこでイクつもりなんだろう。
お腹？　胸……？
口の中……？
それとも、私の中……？
「あぁああっ、あぁぁっ、ああんっ、イイッ、イイッ！ぁあああっ……！イク、いくぅぅっ……！」
ビュルルッ
ビュッ
「……っっっ……ああああっ……出るっ……！」
「あぁあぁっ！イッくっ……イっちゃうぅぅぅぅ……だめぇっ……イクっ！　イクっ！……イクっ!!　ッ――!!」

「ああ……ぁ……あ……
あ、あ……あっ……」
中で新開さんの
お×◆××がどくどくしていた。
あぁ……やっぱり……
ゴボッ
ズンッ
はぁ～……♡
はぁ～……♡
ズンッ
私の中に、
そのまま出したんだ……
「じゃ、上に乗って」

「あっ、あんっ、んくっ……
はっ、んっ、い……やぁ……っ、
ああ……ハァア……ぁあっ、
はぁっ……あぁあっ……！」
このままだとまた、
中に射●されちゃうのに……
「ぁあっ……いゃ……あ……
あはぁ……んっ……くぅん……
はあっ……あっ、ううっ、
ん…あぁっ、んっ、んんっ！」
はぁ
はぁ
なのに、もっとしたい。
もっともっと、
朝まで新開さんと
繋がっていたい……

「あっ、あぁっ……
あ、あ、いや……ぁっ……精●っ、
中で、ぐちゅぐちゅ、いってるっ……
んっんっ、あっ、はんっ、ああっ、
ああん、やっぁあっ、
んん……あぁあっ……ああ……！」
「中に出されたことはあるの？」
どくん
どくん
どくん
はぁ
はぁ
「はあぁっ……んんっ……
ああぁあっ……い、一回だけっ、
ああぁっ、ああっ、
あぁっ……ぁあぁんっ……」
「じゃ、俺は2回出すね」
「だめ、あ、あ、っ……だめ、
だめっ……だめぇっ……あ、あ、
だめ、抜いてっ……ぇっ……！」

……でも、すごく気持ちいいの。
本当はやめたくないの。
朝まで新開さんとドロドロな
セックスをしたいの……
「あぁあっ……はぁっ、
いくっ……ぁあぁっ……！
いくっ……イっちゃうぅ……
あっ、ああっ、あぁああっ……
ぁあっ……イクっ……」
はぁ
はぁ
ズンッ
ズンッ
ズンッ
「あぁあぁぁぁぁぁぁっ……
あぁぁぁぁぁぁぁぁ――」
やっぱり違う。

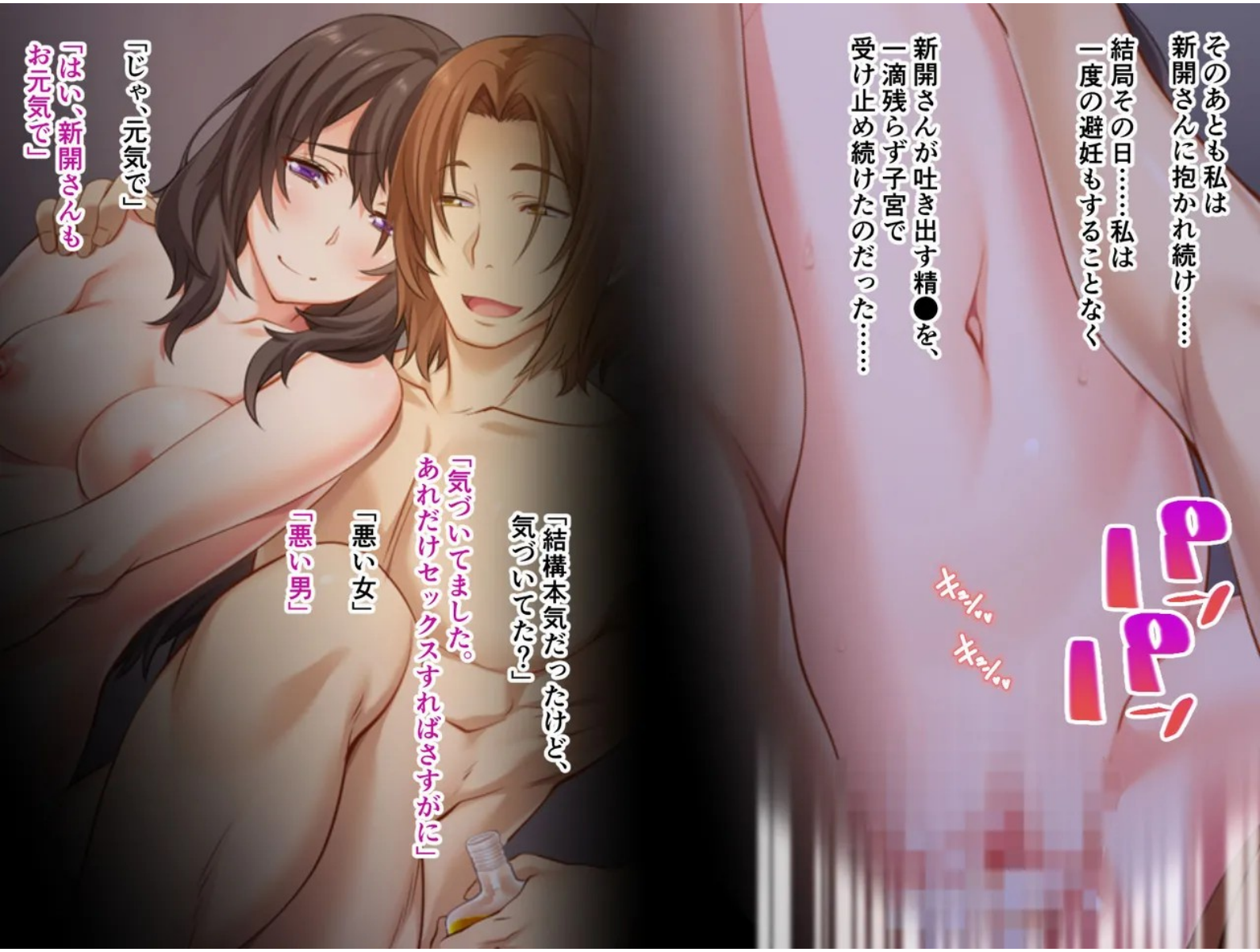
「あんっ、あっ、あぁっ、
そこっ、だめっ、んっ、はぎっ、
そこっ、だめっ、ひぃっ、
あっ、あっ、だ、だめ……」
もう、カラダは
新開さんのセックスじゃないと
満足できないみたい……
「腰、すごく動いてるよ。
今日はすごいね」
はぁ
はぁ
「だって、だってっ……
とまんないんだもんっ……
ああっ……新開さんのお××××、
き、気持ちよすぎてっ……！
あぁぁ……ぁあっ……ぁあっ、
そんなっ……ぁあっ……」
「いいよ、そのままで」

「くるのっ……っぁっぁあっ……
あ、あ、あぁっ……あっ……っ……
だめっ、あ、あ、あ、
くるっ……またくるぅっ……！」
「あ、あっ、来るっ、来るっ、
来るぅぅぅぅぅっっ！
っっっっっ——!!」
はぁ
はぁ
「はぁっ……はぁっ！
はぁっ……はぁっ、
はぁっ……はぁっ……」
「またイったのか。
ほんとに、えっちが
大好きなんだな、真由美は」
「はぁっ、はぁっ、
す、好きっ……えっちっ……
だいすき、好きっ……
新開さんのえっち、すきっ！
はぁあっ、ぁあぁあっ……」
ヒクンッ
ヒクンッ
ヒクンッ

「俺の事も名前で呼んでよ」
「あ、あ、あ、あっ、さ、悟っ……！
あ、あ、あ、あはぁ……！
すき、悟のえっち、一番すきっ…
…好きっ……ああっ……
大好きぃっ……！」
「そんなに気持ちいいの？
旦那は家で待ってるのに」
ぷぁ～…♡
ぷぁ～…♡
「だ、だってっ……
す、すごいっ……
気持いいもんっ……！
あはぁっ、
あぁぁっ、あぁあっ！」
「奥っ、当たるっ……！
ああっ、当たる、
当たるよぉっ……！
あっ……ぁあっ……
んあぁんっ……！」

「気持ちっ……いいっ、凄い、ぁあっ……凄いの、ほんとに凄いのっ……！あぁああっ！」
「あんっ……あっあっあぁっ！悟っ、きて、一緒に、ぁああっ、ハァアッ、あ、ああっ……いや、いや、いやぁっ！」
「……いいよ。いっしょにイこう、真由美」
「あ、ああっ、だ、だめ、だめ、だめだめ、だめっ……イク、いく、いく、いく、いくのっ……いくのおおっ、いくのおおおっ……！」
「ッッ……ああっ、もうイキそうだ……真由美、どこに出せばいい？」

「中っ、中でいいからっ……」
「いいんだな、本当に？」
私はうんうんと頷いて腰を思い切り振った。
「ああ、っ……イクっ……中に出すぞ、真由美っ……！」
「きてっ……来てぇっ……ふぁっ、ふぁっ……あっ、んんっ！くぅっ、あああああああっ……！」


そのあとも私は
新開さんに抱かれ続け……
結局その日……私は
一度の避妊もすることなく
新開さんが吐き出す精●を、
一滴残らず子宮で
受け止め続けたのだった……
ピーピーピー
キッ…
キッ…
「結構本気だったけど、
気づいてた？」
「気づいてました。
あれだけセックスすればさすがに」
「悪い女」
「悪い男」
「じゃ、元気で」
「はい、新開さんも
お元気で」

「あ、あ、あっあっはぁっ、んくっ、くふぅっ、あっ、うんん……あぁっん……」

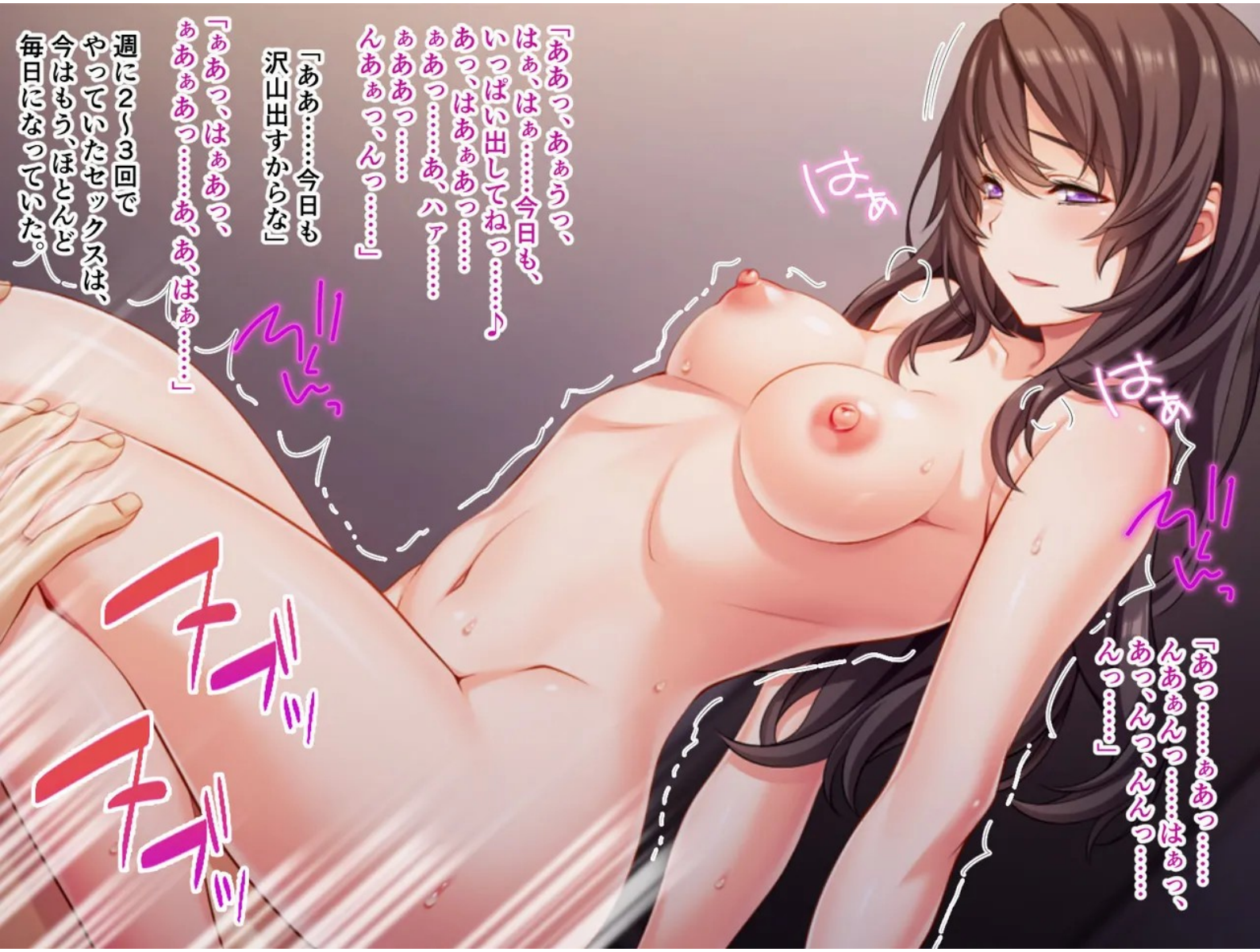
真由美が退職してから。

俺たちの本格的な子作り生活がスタートした。

「あっ、あっ、あっ……ぁあっ……
靖くん……んっ……気持ちいいよっ……
あぁあぁんんっ……っ……んっ、くぅっ……」

かつて新開さんに抱かせていたのが、
もう随分と昔のことのように感じる。

実際にはまだ、数か月しか経っていないのに。


「あっ……ぁあっ……
んあぁんっ……はぁっ、
あっ、んっ、んんっ……
んっ……」
はぁ
はぁ
「ああっ、あぅうっ、
はぁ、はぁ……今日も、
いっぱい出してねっ……♪
あっ、はぁあっ……
ぁあっ……あ、ハァ……
ぁあああっ……
んあぁっ、んっ……」
「ああ……今日も
沢山出すからな」
「ぁあっ、はぁあっ、
ぁあぁあっ……あ、あ、はぁ……」
週に2〜3回で
やっていたセックスは、
今はもう、ほとんど
毎日になっていた。

それはもちろん、早く子供が欲しいという理由もあったのだが……
「はあぁぁあっ……あふぅっ……あ、ああっ……イイッ、んっ、ぁあぁんっ……！」
はぁ
はぁ
……真由美を抱きたくて抱きたくてたまらないという。
そんな俺の欲求に真由美が応えてくれているからでもあった。
「あぁっ……あぁっ……いっ……あぁあっ……ふぁっ……はぁっ、はぁっ、あ、いっ、あっ……あぁあっ、いっ、いいいっ……」

「っっ……はあっ……はあっ……」
「もっと……もっとっ……
あぁっ……もっとして……
靖くんっ……ぁぁっ……」
はぁ
はぁ
「もうそろそろっ……
出るよっ……」
「あああぁん、私もっ……
きちゃうっ……あぁっ、
気持ちいいよっ……！
靖くんっ……靖くんっ……」
射●に向けて、思いきり腰を動かす。

「あっ、あっ、あぁぁぁっ！
あぁっ……あぁ……あっ、あっ、あっ！
きて、きてぇっ……あぁ……！」
はぁ
はぁ
ヌンッ
ヌンッ
プチ
プチ
ビュッ
ビュルルッ
ビュッ
「真由美っ……
愛してるっ……！」
「靖くんっ……
好き……すきっ……
あ、あああ、ああ、あ、っ……
愛してるっ……
愛してる――っ……!!」

「んはぁっ！　はあっ！
はあっ……はぁぁっ……」
「はぁ……はぁっ……！
はあっ！　はあっ……はぁ……
はぁ……はあぁぁぁ……」
はぁ～……♡
はぁ～……♡
「ふふっ……まだお腹の中熱い」
「……まだ入ってる感じする？」
「靖くんのが、中にたくさん
入ってるんだなーって……」
ビクン
ビクン
ゴボ
ドロォ

「……そっか」
「幸せ……」
そうして俺たちはどちらからともなく顔を寄せ合い……
はぁ～……♡
はぁ～……♡
「んっ……ちゅっ……」
幸せなキスを交わした。

「愛してるよ、靖くん……」
真由美の体を抱き寄せる。
そして……
この幸せをかみしめる。
クト
出来る事なら
ずっと、ずっと……
こうして、愛し愛される関係を
続けていきたいと、俺は願うのだった。
――終わり。

©アトリエさくら